

日本福祉大学社会福祉学部

『日本福祉大学社会福祉論集』第141号 2019年9月

〈研究ノート〉

福祉専門職の「援助観」に関する文献検討

丹 羽 啓 子
久 世 淳 子
武 田 啓 子
水 谷 なおみ
藤 原 秀 子

要 旨

著者らはこれまで介護職員が抱く「介護観」に着目し、「介護観」が介護実践に及ぼす影響について研究に取り組んできた。「介護観」に類似する概念として、ソーシャルワーク（社会福祉）の領域では「援助観」という語が用いられており、「援助観」は専門職としての判断の基盤となるものとされている（日和（2012）；34）。

本稿では、CiNiiを用いて文献検索を行い、該当する文献6件から福祉専門職の援助観にみられる共通項を整理した。その結果、福祉専門職の援助観に通底するものとして、「クライアントを尊重すること」、多職種・クライアントとの「連帯・協働・共有」、 「内性的・反省的实践」、 「生活者としての視点」が抽出された。

今回の文献検討の結果をふまえ、今後は介護職員を含めた福祉専門職の「援助観」（または「介護観」）の形成過程について検討していきたい。

キーワード：福祉専門職，援助観，介護観

I. 問題意識

健康科学部リハビリテーション学科介護学専攻では、2016年度以降、介護観¹⁾が介護実践に及ぼす影響に関する研究に取り組んでおり、介護職員を対象とした調査を行った結果、「利用者の尊厳」、「介護技術・知識・理論」、「利用者と職員の距離・関係」が三大介護観であることが明らかとなった（藤原ら（2019））。この介護観に類似する概念として、ソーシャルワーク（社会福祉）の領域では「援助観」²⁾という語が用いられることが多く、福祉専門職を対象とした援助観に関する調査研究がいくつか行われている。

本稿では、これらの先行研究において明らかにされている福祉専門職の援助観に関する見解を整理し、福祉専門職に求められる援助観を明らかにする。このことは、介護観と援助観との共通点および差異について考えていくうえでの一助となるものとする。

II. 研究目的

先行研究において明らかにされた福祉専門職の援助観を整理し、その特徴について明らかにする。

III. 研究方法

CiNii (NII 学術情報ナビゲータ) を用いて文献検索を行った。本稿の執筆を開始した時点 (2018 年 12 月) までに出版された論文を対象に、「社会福祉」「援助観」をキーワードに検索したところ 28 件、「ソーシャルワーク」「援助観」のキーワードでは 11 件、「社会福祉士」「援助観」のキーワードでは 4 件の論文が抽出された (重複あり)。それらのうち、福祉専門職の援助観に関する論文 6 件を対象に検討した (表 1 参照)。

表 1 福祉専門職の「援助観」に関する主な論文

No.	著者	タイトル	調査方法
1	横山登志子 (2004)	精神保健福祉領域の「現場」で生成するソーシャルワーカーの援助観: ソーシャルワーカーの自己規定に着目して	精神保健福祉領域で10年以上の経験のあるソーシャルワーカー3名を対象としたインタビュー調査。
2	久保美紀 (2010)	多文化ソーシャルワークの援助観—異文化のルーツをもつソーシャルワーカーの実践を手がかりに—	アメリカ・ワシントン州の日本人ソーシャルワーカー4名(5年以上の実践経験、渡米生活10年以上)を対象としたインタビュー調査。
3	白井はる奈、 林悠子 (2015)	対人援助者に求められる援助観: 乳児保育における熟練保育士の語りの分析を通して	保育士5名(経験年数9～35年)を対象としたインタビュー調査。
4	小川幸裕 (2008)	「独立型社会福祉士」に関する仮説的研究: 社会福祉士が独立を選択する過程にみる「援助観」形成プロセス	独立型社会福祉士としての実践経験3年以上の4名を対象としたインタビュー調査(独立以前に福祉機関・組織での雇用された経験あり)。データについてはM-GTA法により分析。
5	小川幸裕 (2012)	自律性の確保を契機としたソーシャルワーク課題の再形成と実践観形成プロセスの検討—独立型社会福祉士の実践から—	独立型社会福祉士28人を対象としたインタビュー調査。データについてはM-GTA法により分析。
6	日和恭世 (2014)	ソーシャルワーカーの実践観に関する一考察: テキストマイニングによる分析をもとに	社会福祉士3名(経験年数5年以上)を対象としたグループインタビュー。

IV. 倫理的配慮

文献検討に際しては著作権に配慮し、原著論文の表現を引用する。

V. 結果

1. 文献の概要

検討対象として抽出した6件の論文のうち、調査対象を特定の分野・領域の福祉専門職を対象としたものが3件（No. 1～3）、独立型社会福祉士の援助観に関わる調査研究が2件（No. 4～5）、社会福祉施設・機関で働く社会福祉士の実践観に関する調査研究が1件（No. 6）であった（表1参照）。以下では、各論文の概要を整理する。

2. 領域ごとにみた福祉専門職の援助観

横山は、「ソーシャルワークの『現場』は常に『社会統制的機能』と『クライアントの自己実現促進機能』という価値の二重拘束性が存在する」と指摘している（横山（2004）；25）。中でも、精神保健福祉領域においては社会統制的機能が強調されてきた歴史があり、そこで働くソーシャルワーカーは「社会正義」「主体性尊重」「自己決定」という職業的価値観との間での倫理的ジレンマを経験することになる。こうした倫理的ジレンマを感じながら、「援助とはだれのなにを助けることなのかといった本質的な問い」に悩まされる（ibid.；25）。こうした精神保健福祉領域の特徴をふまえ、横山は、精神病院、総合病院の精神科に勤務する3名のソーシャルワーカーを対象に半構造化面接を実施し、精神保健福祉領域で働くソーシャルワーカーの援助観について調査を行った。横山は、「専門家（援助者）－相談者（クライアント）」関係においてソーシャルワーカーが自分自身をどのようにとらえているか（＝自己規定）、またクライアントをどのようにとらえているか（＝他者規定）に着目し、ソーシャルワーカーの援助観について考察した。調査対象者である3名の語りからは、「援助関係を明確な2者構造としては必ずしもとらえておらず、むしろ『自らの延長線上にクライアントを見いだす』立場をとって」いることが明らかとなり（ibid.；31）、「『専門家』としての役割を引き受けつつ、自らの生きざまに照らして『クライアント』とされる人との連帯点を見いだしながら対話していけるかどうか、問われている」と述べている（ibid.；30）。

次に、多文化ソーシャルワーク³⁾領域におけるソーシャルワーカーの援助観に関する論究をとりあげる。久保は、アメリカにおいて多文化ソーシャルワークを実践する日本人ソーシャルワーカー4名への半構造的インタビューから、多文化ソーシャルワーカーがどのような援助観を生成しているかを明らかにしている。調査結果から、久保は、多文化ソーシャルワーク実践においては、ワーカーが自らの専門性の限界を認識することを指摘している（久保（2010）；60）。多文化

ソーシャルワークにおいては、言語や文化的な違いから、ワーカークライアント間の相互理解が難しいこともあり、「相手に対する尊敬の念がなければ、関係性の構築はでき」ず、「相手から教わる」という姿勢や、「相手の文化に対する尊敬」といった調査対象者の語りも紹介されている (ibid.; 60). このように、多文化ソーシャルワークにおいては「ソーシャルワーカーが異文化を受容し尊重することが不可欠」であり (ibid.; 62), 異文化のルーツをもつソーシャルワーカーとしての援助観は、「異文化のクライアントとの学び教えあう関係をとおして生成されている」と述べている (ibid.; 61).

最後に、白井・林 (2015) による保育士の援助観についての研究をとりあげる。白井らは、熟練保育士の保育観を明らかにするため、保育士5名を対象に半構造的インタビューを行い (保育士経験は平均 18.8 年 (9 ~ 35 年目)), インタビューデータの結果から次の4点について考察している。第一に、「対象者の主体性を尊重する」という点である。調査対象者からは「相手 (= 子ども) が主体」ということが何度も語られ、このことから「子どもであっても一人の人間として尊重」するという概念を導き出している。白井らが行った熟練作業療法士を対象としたインタビュー調査においても「対象者の主体性を大事にする」という概念が得られたことが紹介されており、「相手が子どもであれ、大人であれ、認知症を持つ高齢者であれ、相手を全体として受け止め、尊重すること」が対人援助職にとって何よりも大切であることが再確認されたとしている (白井・林 (2015); 26). 第二に、「エピソード記述の意味」という点である。白井らの調査結果から、「エピソード記述が保育の質向上を支える因子の一つ」であるとともに、「自分の援助の『意味』を確認することになり、援助者の自己肯定に繋がる」と考察している (ibid.; 26-27). 第三に、「保育観を考え、共有することの大切さ」という点である。保育士が互いに「何を大事にして保育するかを認識し、仲間で共有する」ことにより、「関わり方を知識として会得するだけでなく、そのベースとなる相手への思いを熟考し、仲間と共有することで、パターンにはまらない、臨機応変な援助ができる」としている (ibid.; 27). 第四に、「援助者がお互いを援助しあう『援助者の援助』」という点である。「上下関係なく」という調査対象者の言葉は、職場内での横の関係が築かれており、協力し合って保育の質を高める努力がなされていることを意味している。そのことが、保育士同士が互いを援助する「援助者の援助」につながり、結果的にそれぞれの保育士の専門性の向上につながっていく、と考察している (ibid.; 28).

3. 独立型社会福祉士にみられる援助観

小川は、社会福祉士のなかでも独立型社会福祉士に着目し、その援助観についての研究を行っている。組織や機関に所属する社会福祉士は、所属組織・機関の利益と支援対象者である当事者の利益との間で、社会福祉士としてあるべき姿を模索するというジレンマを抱えており、社会福祉士としてのアイデンティティの確立が困難になっているとの認識から、組織・機関に所属しない独立した立場の社会福祉士 (= 独立型社会福祉士) に着目した研究を行った (小川 (2008); 11).

2007年に実施した調査では、独立型社会福祉士としての経験が3年以上の4名を対象とした半構造化面接が行われた。調査結果より、「独立を選択した社会福祉士が援助観を形成するプロセスは、【あるべき社会福祉士像との比較】を経て【一時離脱による価値の醸成】に至り、そこを起点として【価値実践スタイルとしての独立】が行われて」と整理した。【一時離脱による価値の醸成】とは、「現場におけるジレンマの蓄積を契機とし、一時的にジレンマから離れることで専門職としての価値と生活者としての価値を醸成していく」ことである (ibid.; 13)。【価値実践スタイルとしての独立】とは、「一時離脱によって醸成された専門家としての価値と生活者としての価値とは何かといった本質的な問いを保持し続けるプロセスを経て、立場が異なる価値を問い続けながら実践できるスタイルを選択」することとしている (ibid.; 13)。また、小川は、【一時離脱による価値の醸成】期において、独立型社会福祉士が「援助する者・される者という関係性から距離をおくことで自らも一人の生活者であることを意識化」していくと述べている (ibid.; 15)。つまり、独立を選択する社会福祉士は、専門的価値と個人的価値という立場が異なる価値を問いのまま保持し続けるという援助観が見出されることを明示した (ibid.; 16)。

また、小川は調査対象の独立型社会福祉士を28名に増やし継続的な調査を行っている (小川 (2012))。その調査から、所属機関・組織から独立することにより社会福祉士は自律性を獲得し、制度等の狭間に存在する課題に気づくようになるとしている。さらに、狭間課題を再認識した結果、独立型社会福祉士は、以下のような6つの実践観が形成されるようになったと整理している (ibid.; 9)

- ① ささえる (支援の焦点を生活からずらすことなく地域での生活を包括的に支援する)
- ② まもる (権利意識を醸成し利用者の語りにもとづいた権利擁護を活動の核とする)
- ③ みせる (活動を通して社会福祉士のアイデンティティの確立をめざす)
- ④ つなぐ (ネットワークや支援ツール、リスクマネジメント、対価獲得など多様な意味を付与し独立型社会福祉士の生命線とする)
- ⑤ つくる (利用者個々の利益を高める活動だけでなく利用者の利益の延長線に地域づくりも視野に入れる)
- ⑥ ゆらぐ (問いの保持を基点に非倫理的実践を発生させないよう反省的実践に努める)

4. 社会福祉士の「実践観」に関する研究

日和は、ソーシャルワークが行う業務が他の対人援助専門職とは異なる「何か」を有しているという考えのもと、「ソーシャルワーカーが実践のなかで何を感じ、何を考え、どのような判断をくだしているか等を明らかにすることによって、ソーシャルワークの専門性や専門職性を明らかにすることができるのではないかと提起している (日和 (2014); 74)。

そうした考えのもと、ソーシャルワーカーの実践観⁴⁾を明らかにするため、社会福祉協議会、児童発達支援センター、障害福祉サービス事業所に勤務するソーシャルワーカー3名を対象にグループインタビューを行った。得られたデータについてはテキストマイニングを用いて分析を行

い、625のカテゴリが生成された。そのうち、40回以上出現しているカテゴリは「思う」「クライアント」「ソーシャルワーカー」「良い」「家族」の5つであり (ibid.; 77), この分析結果から、ソーシャルワーカーは、クライアントの置かれている状況に対して、①クライアントはどのように思っているのか、②クライアントの家族はどのように思っているのか、③クライアントにとってより良い生活とは何か、④クライアントが活用できるサービスは何か、などを大事にしながら実践していることが推察されると述べている (ibid.; 78-79)。そのうえで、「ソーシャルワーカーは、クライアントをシステムとして捉え、社会関係に焦点を当て、常に、クライアントにとっての最善の利益を考えながら、ソーシャルワーカーとして何をなすべきかを判断」しており、「その際、最も大事にしているのは、クライアントが抱えている問題をクライアントが自身の問題として受けとめ、自分の力で解決していくことができるよう、クライアントのコンピテンスの強化を図ることである」としている (ibid.; 80)。

VI. 考察

本研究において検討対象とした先行研究は、インタビュー調査から得られた福祉専門職（ソーシャルワーカー）の援助観について言及したものであり、その対象となる人々も少数である。そのため、これらの先行研究から得られた知見を、福祉専門職の援助観として普遍化することは難しい。しかし、多様な分野で働く福祉専門職の援助に対する語りをベースにした調査研究であることから、これら6件の先行研究の結果を横断的にみていくことにより、特定分野に限定されない、福祉専門職にとっての共通基盤となる援助観がみえてくると考えられる。ここでは、前項でとりあげた先行研究で明らかにされたソーシャルワーカーの援助観にみられる共通項について整理していく。

第一に、「クライアントを尊重する」という考え方である。これはクライアント個人の意思や考えを尊重するという意味だけでなく、久保による研究でも述べられているように、クライアントが属する文化に対する尊敬という意味も含まれる。日和の主張を参考にすると、クライアントをシステムとして捉え、クライアントとそのシステムを尊敬するという姿勢が福祉専門職に求められると考える。

第二に、「連帯・協働・共有」という考え方である。久保は多文化ソーシャルワーク実践におけるワーカーの専門性の限界について言及しており、異文化のクライアントとともに学び教えあう関係の必要性を提起している。また、白井・林は、職員同士で保育観を共有することの重要性について指摘しており、保育観の質の向上においては職場内の横の関係も重要となると述べている。こうしたクライアントと福祉専門職の「連帯・協働」に加えて、福祉専門職同士または職員同士の「協働・共有」という考え方が福祉専門職の援助観に含まれると考える。

第三に、「内省的・反省的实践」という考え方である。白井・林は、保育実践においてはエピソード記述を用いて自身の援助実践をふり返ることが保育の質の向上に有効であると指摘してい

る。また、小川は、福祉専門職が自身の実践に対する“問い”を保持し反省的实践を行っていくという実践観について言及している。こうした自身の実践をふりかえる姿勢が福祉専門職にとって不可欠であると考える。

最後に、「生活者としての視点」を保持するということである。この点については、直接的には小川が提起しており、福祉専門職は自らも生活者の一人であることを意識することが大切であるとしている。横山は、「自らの延長線上にクライアントを見いだす」と表現しているが、このような視点は、福祉専門職とクライアントを「援助する側―援助される側」という2者構造でとらえるのではなく、同じ生活者として専門職もクライアントも存在するというとらえ方である。この考え方は、前述した「クライアントを尊重する」「(クライアントとの) 連帯・協働」に連関するものであると考える。

VII. 結論

先行研究における福祉専門職を対象とした援助観に関わる調査から、福祉専門職の援助観に通底するものとして、「クライアントの尊重」「連帯・協働・共有」「内省的・反省的实践」「生活者の視点」の4点が抽出された。今後は、冒頭でも述べた介護観と援助観の共通点および差異について検討したうえで、福祉専門職としての援助観を習得するための教育モデルを考案していきたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP16K04717 における研究の一部です。研究の機会をいただき深謝いたします。

注

- 1) 本研究では、介護観について、「介護するうえで、自分が大切にしたいと思うこと（信念・価値に相当するレベル）」と定義する（『介護観が介護実践に及ぼす影響―介護実践の構造化に向けて―』（JSPS 科研費 JP16K04717, 研究代表者：武田啓子）より）。
- 2) 日和はソーシャルワーカーの援助観について、「ソーシャルワークの理論値と経験知とを統合させた個々のソーシャルワーカー独自のものの見方、考え方であり、ソーシャルワークを行為化するまでにくだされる専門的判断の基盤となるものである」と述べている（日和（2012）；34）。
- 3) 久保は、「多様性を尊重した、多様な文化的背景をもつ人々とのソーシャルワーク」として「多文化ソーシャルワーク」という語を用いている（久保（2010）；42）。
- 4) 日和は、平塚（2011）によるソーシャルワークの実践観をもとに、「実践におけるソーシャルワーカーの思考や判断の総体」として実践観を捉えている。なお、平塚によるソーシャルワークの実践観の定義は以下のとおりである。
「ソーシャルワークの理論値とソーシャルワークの経験知とが＜私＞というソーシャルワーカーの身の内て結びつけられて形成される援助観（価値―倫理観含む）の総体として行為主体により知的に編まれた概念的構造物」

引用文献

- ・藤原秀子・水谷なおみ・武田啓子・間瀬敬子・丹羽啓子・久世淳子（2019）「介護職員における介護観の特徴」，健康科学論集 22（投稿中）
- ・平塚良子（2011）「ソーシャルワークの実践観」，ソーシャルワーク研究 36（4），60-67
- ・日和恭世（2012）「ソーシャルワーカーの援助観の検討—ソーシャルワークが専門職の実践であるために—」，九州社会福祉学№ 8，25-36
- ・日和恭世（2014）「ソーシャルワーカーの実践観に関する一考察：テキストマイニングによる分析をもとに」，別府大学紀要（55），73-83
- ・久保美紀（2010）「多文化ソーシャルワークの援助観—異文化のルーツをもつソーシャルワーカーの実践を手がかりに—」，明治学院大学社会学・社会福祉学研究（132），41-65
- ・西川ハンナ（2009）「ソーシャルワーク専門職の価値志向性測定試案」，共栄学園短期大学研究紀要 25，67-78
- ・小川幸裕（2008）「独立型社会福祉士」に関する仮説的研究：社会福祉士が独立を選択する過程にみる「援助観」形成プロセス」，弘前学院大学社会福祉学部研究紀要 8，11-17
- ・小川幸裕（2012）「自律性の確保を契機としたソーシャルワーク課題の再形成と実践観形成プロセスの検討—独立型社会福祉士の実践から—」，弘前学院大学社会福祉学部紀要第 12 号，1-10
- ・白井はる奈，林悠子（2015）「対人援助者に求められる援助観：乳児保育における熟練保育士の語りの分析を通して」，社会福祉学部論集 11，11-30
- ・横山登志子（2004）「精神保健福祉領域の「現場」で生成するソーシャルワーカーの援助観：ソーシャルワーカーの自己規定に着目して」，社会福祉学 45（2），24-34